

[講演要旨]町居崩れ

株式会社 防災地理調査* 今村隆正

§1. はじめに

寛文二年(1662)に発生した琵琶湖西岸地震の際、朽木谷では「町居崩れ」と呼ばれる大規模崩壊が発生した。さらに、その崩壊土砂により安曇川が堰止められ、天然ダムが形成された。

今回の発表は、筆者らが今までに調査研究を続けてきた成果を基に、町居崩れとその災害現象について再整理し、巡検案内の一環として活用されることを目的とした発表としたい。

§2. 琵琶湖西岸地震

寛文二年五月一日午上刻(1662年6月16日午前11時頃)、琵琶湖の西岸付近を震央とする琵琶湖西岸地震(M=7 1/4~7.6)が発生した。この地震による被害地域は小浜・大津・京都・大坂など広範囲に及んだ(宇佐美,2003など)。

安曇川上流の朽木谷では、町居崩れとよばれる大規模崩壊が発生し、崩壊土砂の直撃により、約560人が犠牲になった。さらに、この崩壊土砂によって天然ダムが形成され、堰止め・決壊による被害が記録されている。坊村町自治会蔵の「葛川谷絵図」には、葛川谷とその東側の比良山地の状況、さらに、この地震で発生した町居崩れや、一部残った天然ダム、貞観元年(859)に開創された天台宗の寺院「葛川明王院」、町居集落なども描かれている。



図1 「葛川谷絵図」の一部(坊村町自治会蔵)
(大津市歴史博物館, 2000)

§3. 町居崩れと天然ダムの規模

琵琶湖西岸地震による土砂災害で被害が最も大きかったのは朽木谷で、当時の町居村対岸の斜面(現在の梅ノ木集落の背後斜面)が大規模崩壊し、甚大な被害が発生した。『明王院文書』によれば、「五月一日に大地震があり、山岳斜面は崩壊し、谷からは大水によって土石が流出した。坊村の田畑などは壊滅し、明王堂や石舞台・大橋・寺周囲の石垣は崩れた。榎村(梅ノ木)東の大峰が十三町程上より二つに破れて崩壊し、榎・町居の両村を埋没させた。」と記録されている。

町居崩れは、比良山地の武奈ヶ岳の南西約1.5km付近に位置し、現在「イオウハゲ」と呼ばれる崩壊斜面付近に発生した大規模崩壊であり、崩壊長:700m、最大幅:650m、比高:360m、平均傾斜:30度、崩壊面積:46万m²、崩壊土砂量:2400万m³である。崩壊土砂は、安曇川を堰止めて天然ダムを形成した。湛水標高:312m、湛水高:37m、湛水面積:48万m²、湛水量:590万m³(今村・他,2002)。

この天然ダムにより、坊村の明王院一帯までが湛水した。『明王院文書』によれば、「大川(安曇川)が堰止められ、明王院の屋敷まで水位が達し、坊村の屋敷などは残らず浮流した」。また、「坊村の人家は浮流し、(五月)十五日辰下刻(1662年6月30日午前9時前頃)、天然ダムが切れて水位が低下したが、その後も町居から明王院の下付近まで湛水が残り、大池となっていた(図1)。

引用文献

今村隆正・井上公夫・西山昭仁(2002):琵琶湖西岸地震(1662)と町居崩れによる天然ダムの形成と決壊, 歴史地震, 18号, 52-58.

今村隆正・井上公夫・西山昭仁(2002):琵琶湖西岸地震と町居崩れ, 平成14年度砂防学会講演概要集, 324-325.

大津市歴史博物館(2000):企画展図録, 古絵図が語る大津の歴史, 64p.

* 〒206-0033 東京都多摩市落合 1-2-5 パステルプラザ 705
電子メール:info@gpi-net.jp